

## 【W6】サウンド・エデュケーションから始まるオンガクの創生:アートとウェルビーイングを考える

【講師】今田 匡彦

### 【要旨本文】

現在私たちが一般的に考える「音楽」の概念は、ヨーロッパの啓蒙の時代に、実証主義、科学主義、合理主義の裏返し形で生まれた。この科学的啓蒙思想は、古代から中世が支えた〈ユダヤ・キリスト教、ギリシャ的〉世界観の信憑性を打ち砕く。すなわち、それまで異なっていた美（神の領域）と芸術（人間の技術による模倣）が手を携え、天才、創造、独創（本来神の領域だったのが人間に移行する）がトレンドとなった（この所謂〈西洋音楽の自律性〉を、例えばブルデュー(Bourdieu 2010)は、逆に〈音楽の唯物論的商品化〉と皮肉る）。しかし最も問題なのは、この音楽の潮流から、神童を除く子どもたちや障害のある人たちが排除されてきたことだ。

恐らくそのため、カナダの作曲家 R.マリー・シェーファーは、オンガクはやはり万人のためにあるべき、と考えた。シェーファー (Schafer 2005, 今田訳) は、今日の音楽教育の問題を: 1) 外国の音楽ばかりに価値を置く; 2) 他人が創った音楽に価値を置く; 3) 高度な技術を要求するので子どもたちは音楽本来の喜びを忘れる; 4) 高価な楽器に価値を置き、安価な素材は無視される; 5) 教師も親もコンサート以外の音楽を理解できない; 6) 音楽は科学、他の芸術、環境とコンタクトが無く孤立している; 7) 教師は娯楽産業に対して無力である、と指摘する。彼のこの考え方は、公正性、柔軟性、簡素な直観性、エラーへの寛容性、身体への非負担性等を目指したユニヴァーサル・デザインの原理と多くを共有する。

環境の音の不思議から、紙などの身近な素材や声、そして身体を使うことで、プロの手に委ねない、観客を想定しないオルタナティブなオンガクを、音楽療法を手掛かりに、本ワークショップにて体験できればと思う。

Reference:

Bourdieu, P. (2010) . *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. New York: Routledge

Schafer, R.M. (2005). *HearSing*. Ontario: Arcana Edition.

### 【講師プロフィール】

弘前大学教授、次世代ウェルビーイング研究センター長、Ph.D. (UBC). 単著に『哲学音楽論』(恒星社厚生閣)、共著に『音さがしの本』(春秋社)、*The Oxford Handbook of Philosophy in Music Education*(Oxford University Press), *Creativity in Music Education*(Springer), *The Routledge Companion to Teaching Music Composition in School* (Routledge)などがある。